

人気大関・松ノ音善蔵が亡く

大阪歴史博物館に行った時のことである。博物館が出している『なにわ歴博カレンダー』を手にとると、表紙に力士の錦絵が載っていた。それがまことに美しい。僕は相撲取りが大好きなのだ。錦絵とは、今で言えばグラフィアのこと、相当に人気のあった関取だったのだろう。解説文を読むと、何と、わが吹田出身の大関相撲の力士ではないか。名前は「松ノ音善蔵」、大阪相撲の大関である。早速、大阪歴史博物館に解説文を書かれた飯田直樹さんを訪ねてみることにした。大阪相撲の研究をされている飯田学芸員から聞く「大関・松ノ音善蔵」の世界はとても興味深いものだった。今回は大阪相撲に咲いた一輪の美しい花の探索である

新山ひろし



錦絵 松ノ音善蔵 (二代長谷川貞信作 明治前期 大阪歴史博物館蔵)

松ノ音は超人気力士だった

「松ノ音という関取はどんな人ですか」と飯田学芸員に聞いてみた。「錦絵を見てもきれいな相撲取りで、女性にも人気があったみたいです。明治15年に大関在位のまま30歳で死んでいます。大関は、大阪相撲の当時の最高位です。強さと人気、両方が揃った人気力士です」と飯田さんは言う。

松ノ音が活躍した明治の初めは、東京は東京相撲、大阪は大阪相撲に分かれていた。しかし、時々東西合併相撲が興行され、人気を二分していた。また、侠客が相撲の興業の権利を得ようとし、利権争いの騒動が絶えなかった。そのため、江戸幕府は相撲取り以外の素人が勧進元になることを禁じた。

大関相撲は、東京相撲と張り合っていた

大阪相撲の発祥は、堀江新地の開発に関連して、17世紀末に当地での勧進相撲が認可されたことに始まるとされている。その後、堂島浜、新町、雑喉場、朝などで開催された。特に、大阪では市場社会との関連が強かった。有名な侠客で、米仲仕の経歴を持つ根津四郎右衛門は、朝日山部屋頭取、朝日

山四郎衛門と同一人物と云われている。東京と大阪に分かれて人気だった相撲渡世集団、つまり、プロの相撲興行であったが、昭和2年(1927)、この大阪相撲と東京相撲が合併して大日本相撲協会(現在の日本相撲協会の前身)が誕生し現在につながっている。

大関・松ノ音の墓と地元での人気

さて、松ノ音の墓である。吹田市内本町三丁目、神崎川の近くに「吹田市有」の「川面墓地」があり、その入口の所に松ノ音の墓があった。ちなみに、内本町は、松ノ音の生誕地とされ、言わば、生まれ故郷で眠っているということになる。墓はきれいに管理されている。ここで、松ノ音のエピソードを少し紹介してみることにしよう。

『市報すいた』連載の『わたしたち町の町(川面、大の木かいわい)』によれば「松ノ音は張り手の名人で、6尺(180センチ)を超える背丈があり人力車も特大の別誂えだった。米俵を三つも軽々と持ち上げる怪力だった。スピード出世をねたまれて毒を盛られたという噂が立ったほど人気があった」とある。大阪春秋92号「ハッケヨイ吹いた吹いた!吹田の風」によれば「モテ男、松ノ音に出会って熱を上げた。作栄の恋は仕事場で行われたため収入が減少し、借金をしてまで松ノ音に小遣いを渡すようにな

った」と書かれている。

この話、結局は、見かねた南地の親方が作栄を引き取り、そこで出合いを重ねた。作栄は妻のようにふるまったという。これは明治14年のことで、松ノ音は29歳、死の一年前だった。さて、松ノ音の死についても見ておこう。明治15年、2月、松ノ音は、突然、体の異常を訴える。原因は分からない。病状はどんどん進んでふさぎこんでいた。作栄は、祈禱代、薬代、栄養のある食事と借金をしまくった。作栄の看病のいかにもなく、松ノ音は五月二日に死んでしまう。嫉妬で毒を盛られるというような死に方ではなかった。そして、作栄には大いなる悲しみと当時のお金で約300円の借金が残された

松ノ音の脱走は相撲界の改革のためだった

松ノ音の名誉のためにも、最後に、飯田学芸員が教えてくれた「脱走」のことをもう一度振り返ってみたい。先の「ハッケヨイ・吹いた、

吹いた、吹田の風」によれば、当時は、大阪相撲では年功序列が優先され、実力が評価されなかった。そこで、正当な利益配分を要求して、本場所後、大阪相撲の10名が「脱走」した。その中に松ノ音がいた。彼らは、東京相撲の分派、高砂組に加わり「別派」と呼ばれて、次の東京、大阪も合併相撲に参加した。その「別派」が「脱走」と表現されてしまったのである。世間は彼らを「悪者扱い」したことになる。「この時の東京改正組は東京相撲の内紛で分派した一行で、現在の高砂部屋である」と前掲書は伝えている。その頃、脱走として揶揄された松ノ音を応援する相撲ファンも現れた。新聞の投書に「彼らは親方を捨て脱走したというのだからさぞ乱暴者と思っていたが、宿泊中の言動は規則正しく温和であることに驚いた。他の力士には手本にしてほしい。脱走の汚名がついて気の毒だ」とある。やはり、

松ノ音は正義感の強い相撲の改革者だったのだ。わが吹田は、相撲の町だった。特に、垂水神社で行われる相撲大会は人気だった。そのような吹田の草相撲の環境が、松ノ音と云う才能を育て上げていったのである。今の相撲がサッカーや、プロ野球のようにワールドワイドなスポーツとして国民に愛されていくようになるためには、「国技」というものに寄りかかっているだけではだめだ。「国技」は返上した方がいい。相撲の歴史に立ちかえり、さらに「改革」を進めてほしいと願う。松ノ音なら、きっと、そう考えるだろう。(了)



吹田市の川面墓地にある松ノ音善蔵の墓



- 「なにわ歴博カレンダー」錦絵松の音善蔵 飯田直樹 大阪歴史博物館発行
- 「特集展示 大阪相撲の歴史」飯田直樹 大阪歴史博物館発行
- 「石の声 碑の語り」松の音の墓 銅島敏也 吹田市市長室広報課 発行
- 「市報すいたわたしたちの町川面町」吹田市市長室広報課 発行
- 「大阪春秋91号・92号」所収「ハッケヨイ吹いた吹いた!吹田の風」古谷啓伸著:特に古谷さんの著作からの多くを引用させていただきました。
- 協力 ■大阪歴史博物館 学芸員 飯田直樹氏 資料提供とインタビューをさせていただきます。